主題「子ども達の生きる力を育む地域主体による教育活動」

副主題「目的を明確にした学習・交流・克服体験活動の展開を通して」

広 川 町 教 育 委 員 会
地域活動指導員　貞苅えり子

こんな手立てによって…

〇目的を明確にした学習・交流・克服の３つの体験活動の設定
〇体験活動における学習プログラムの工夫と支援体制づくり

こんな成果があった！

〇子ども達の生きる力（学ぶ意欲と態度、思いやりと郷土愛、たくましさとやり抜く力）を育むことができた。
〇地域の教育力が向上した。

１　考えた

少子高齢化やグローバル化などの社会の変化に伴い、現代社会は多くの課題を抱えており、変化に対応できる人材の育成を社会全体で進める必要がある。このような社会の情勢や国の動向と広川町の教育施策や子ども対象の事業の経緯から、地域が主体となって子ども達の生きる力を育むことは重要かつ価値あることだと考えた。そこで、地域が育む力を知・徳・体の視点から焦点化し、生きる力を下支えするものと位置付けた。そして、そのための主な方法として、目的を明確にした学習・交流・克服の３つの体験活動を設定し、体験活動の展開や支援体制づくりの視点で研究を進め、地域主体による教育活動の在り方について究明しようと考えた。

２　やってみた

事例Ⅰ 学習体験活動では、平成１４年度から実施している「土曜教室」の実績を踏まえて、各校区の学校・家庭・地域連携推進会議との協力体制を基盤にして、運営体制と指導体制を構築し、子ども達のニーズに応える多様な教室を開催し、体験活動・学習内容の充実を図った。また、事例Ⅱ 交流体験活動、事例Ⅲ 克服体験活動においても、それぞれの体験活動の目的を明確にして、運営・指導体制を構築し、各種体験活動を提供した。その結果、子ども達は意欲的に活動に取り組み、落ち着いた態度で学習したり、仲間や地域の人との交流を深めたり、課題を克服して自分達で活動したりすることができた。

３　成果があった！

事例Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを通して、学習・交流・克服の３つの体験活動を仕組んだことにより、子ども達の学ぶ意欲と態度や思いやりと郷土愛、たくましさとやり抜く力を育てることができた。また、体験活動を推進する支援体制づくりにより、地域主体による教育活動の活性化を図ることができた。これらのことから、地域が主体となった教育活動の実践において、各種体験活動を類型化して目的を明確にすることは、内容や方法の充実につながり、子ども達の生きる力を育む上で効果があった。また、体験活動推進のための支援体制を構築することは、子ども達の充実した活動を保障するとともに、事業の継続や発展、地域の教育力向上につながった。

＜目次＞　生涯学習部門作品

主題「子ども達の生きる力を育む地域主体による教育活動」

副主題「目的を明確にした学習・交流・克服体験活動の展開を通して」

１　主題設定の理由 ………… ３
（１）社会の現状と国の動向から ………… ３
（２）広川町の現状や教育施策から ………… ３
（３）子ども対象の事業の経緯から ………… ３

２　主題の意味 ………… ４
（１）「生きる力」について ………… ４
（２）「地域主体による教育活動」について ………… ４
（３）「目的を明確にした体験活動」について ………… ４

３　研究の目標 ………… ５

４　研究の構想 ………… ５
（１）体験活動の展開について ………… ５
（２）体験活動推進のための支援体制づくり ………… ６
（３）全体構想図 ………… ６

５　研究の実際 ………… ７
（１）事例Ⅰ　学習体験活動「土曜教室」………… ７
（２）事例Ⅱ　交流体験活動「地域に学ぶ料理教室」………… １２
（３）事例Ⅲ　克服体験活動「通学合宿」………… １６

６　成果と課題 ………… ２０
（１）研究の成果 ………… ２０
（２）今後の課題 ………… ２０

＜参考文献＞ ………… ２０

＜本文＞　生涯学習部門作品

主題「子ども達の生きる力を育む地域主体による教育活動」

副主題「目的を明確にした学習・交流・克服体験活動の展開を通して」

広 川 町 教 育 委 員 会
地域活動指導員　貞苅えり子

１　主題設定の理由

（１）社会の現状と国の動向から

少子高齢化やグローバル化、情報通信技術の高度化など、変化の激しい社会において、現代社会は多くの課題を抱えている。特に、少子高齢化による社会全体の活力の低下や地域社会、家族の変容による個々人の孤立化、規範意識の低下などの課題は、子ども達の健全な育成の上でも大きな影響があるものと考える。

また、国の第２期教育振興基本計画においては、「自立」「協働」「創造」の３つの理念が掲げられ、「社会を生き抜く力の養成」などの生涯の各段階を貫く４つの基本的方向性が設定された。今まさに、社会の変化に対応できる人材の育成を、社会全体で進めていく必要性が示されている。

このような現状の中、本研究において地域主体による教育活動を進めることは、子ども達の健全な成長を促すとともに、地域の活性化を図る上でも意義深いと考える。

（２）広川町の現状や教育施策から

広川町は、今後、老年人口（65 歳以上）の増加が一層顕著となり、年少人口（0～14 歳）、生産年齢人口（15～64 歳）の減少が進むことが想定される。

このような現状にあって、町の将来像を「安心と喜びを実感できるまちづくり」と設定し、４つの基本理念と６つの基本施策を定めている。その中の一つに、「人が育つ、人を育てるまち」という人材育成が挙げられる。具体的には、知・徳・体のバランスのとれた生きる力を育む学校教育の推進や、地域に密着した特色ある学校づくりをはじめ、総合的な生涯学習・生涯スポーツ環境の整備を図り、未来のまちを担う心豊かで個性と創造性にあふれる人材の育成と、生涯を通じて学び続け、その成果を活かすことができる生涯学習のまちづくりを進める。

本研究において、地域が主体となって学習の場を提供し、子ども達の学びを支援・促進することは、本町の教育施策を実現する上でも意義あるものと考える。

（３）子ども対象の事業の経緯から

平成１４年度の完全学校週５日制の移行に伴って、広川町では、「生きる力」の育成をテーマに、子ども対象の事業を継続して行っている。１０年以上にわたる本事業の展開を通して、子ども達の多様なニーズに対応した学習の場の提供や地域の特性を生かした教室の開催など、広範囲な事業内容の展開と参加者の拡大という成果を挙げることができた。しかし、参加す

る子ども達やその保護者の固定化や意識の格差という課題も見られ、関係機関との更なる連携を図りながら、家庭や地域の教育力の向上に努めていく必要がある。

「土曜日の教育活動」を中心に、学校と地域・家庭の連携が注目されている今、事業の経緯を踏まえて、地域主体による教育活動の在り方を究明することは、今後の事業展開の発展を図るとともに、その基盤となる地域の教育力を向上させる上でも価値あるものと考える。

２　主題の意味

（１）「生きる力」について

文部科学省では、生きる力を右の図のように「確かな学力（知）・豊かな人間性（徳）・健康・体力（体）のバランスのとれた力」と定義しており、平成２０年度の学習指導要領改訂においても、この「生きる力」をより一層育むことを目指している。

これを受けて、本研究においては、地域が主体となって育む力を以下のように焦点化し、図１のように「生きる力」を支えるものと考える。

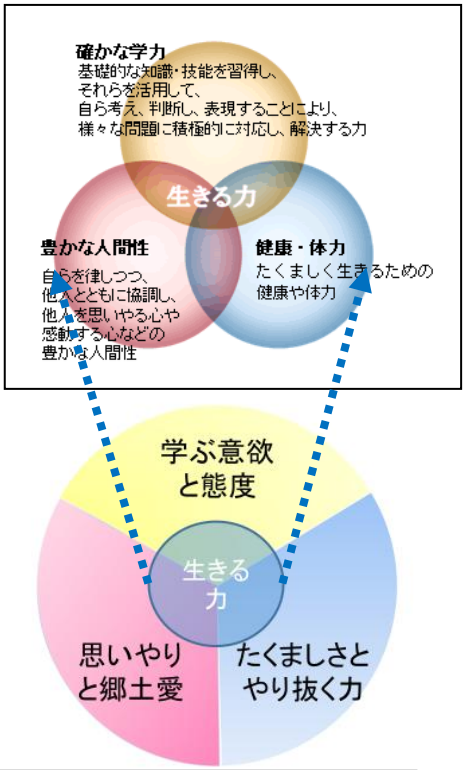


図１；地域主体で育む「生きる力」

知…「確かな学力」の基盤となる「学ぶ意欲と態度」
徳…「豊かな人間性」の素地となる「思いやりと郷土愛」
体…「健康・体力」を精神面から捉えた
「たくましさとやり抜く力」

（２）「地域主体による教育活動」について

地域には多様な技能や経験を有する人材（ひと）や地域の特性を生かした学習対象（もの・こと）がある。本研究においては、地域の「ひと・もの・こと」といった学習素材を有効に活用した学習の内容と方法を構成することで、子ども達に豊かな学びを提供しようと考えた。

「地域主体による教育活動」とは、行政が中心となって構成した、地域の学習素材を有効に活用した学習の内容と方法のことである。

これら（１）（２）を受けて、主題「子ども達の生きる力を育む地域主体による教育活動」を以下のように捉える。

知・徳・体のバランスのとれた力を子ども達に身に付けさせるために、行政が中心となってコーディネートした、地域のひと・もの・ことを有効に活用した学習の内容と方法。

（３）「目的を明確にした体験活動」について

体験活動とは、「何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供されるもの」（平成 19 年中央教育審議会答申）である。つまり、体験活動は、その目的や方向性を明確にすることで、より効果を発揮するものである。本研究においては、

主題である「生きる力」の３つの要素である「知・徳・体」を育むために、各要素に応じて以下のように体験活動を分類する。

要素	育む力	体験活動	主な活動内容
知	学ぶ意欲と態度	学習体験活動	学習への興味・関心を深め広げる各種教室
徳	思いやりと郷土愛	交流体験活動	地域の人や自然、歴史などとのふれあい
体	たくましさとやり抜く力	克服体験活動	宿泊体験など自分達で生活・活動する内容

３　研究の目標

子ども達の生きる力を育むために、学習・交流・克服の３つの体験活動の展開や支援体制づくりを視点にして、地域主体による教育活動の在り方を究明する。

４　研究の構想

（１）体験活動の展開について

広川町の子ども対象の事業を、以下のように３つの体験活動に沿って再構成し、各種体験活動の目的を明確にする。また、その体験活動を通して育む、「学ぶ意欲と態度」や「思いやりと郷土愛」、「たくましさとやり抜く力」について分析することで、子ども達の生きる力を育む上での教育活動の効果について検証する。

体験活動	子ども対象事業	事業名・体験の概要
学習体験活動	土曜教室（大人との合同教室を含む）	しらかねネット土曜教室（上広川小学校区）　８教室 パソコン・絵手紙・太鼓・編み物・はたおり・ふれあい農園 総合スポーツ・お茶を楽しむ
		中広ネットクラブ土曜教室（中広川小学校区）２１教室 編み物・着付け・オルガン・絵画・卓球・紙粘土・子ども料理 健康料理・パソコン・健康体操・キャンドル・はたおり 書き方・ファミリーバドミントン・ソフトバレー・フラダンス 元気の出る・相撲・男の料理・手話・折り紙
		せきじんネット土曜教室（下広川小学校区）　７教室 卓球・はたおり・料理・書道・パソコン・健康体操・糸鋸木工
	夏休み体験学習	夏休みきらめき学習；公民館における、夏休みの各種体験活動
交流体験活動	料理教室	地域に学ぶ料理教室
		町内企業との連携による親子パン教室・ハンバーグつくり教室
	地域体験活動	はにわづくり教室、たけのこ掘り教室
	ボランティア活動	ジュニアリーダー奉仕体験活動、推進部合同研修会
克服体験活動	通学合宿	上広川・中広川・下広川各小学校区での通学合宿
	リーダー研修	「玄海自然の家」での宿泊体験

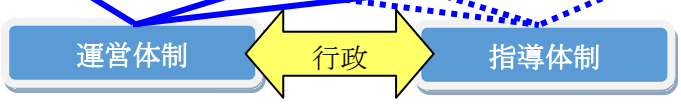
（２）体験活動推進のための支援体制づくり

各小学校区に学校・家庭・地域連絡推進会議（名称；〇〇ネット）を設置し、行政がコーディネートすることで、各種団体との連携を図るとともに、体験活動の事業ごとに協力体制を構成する。

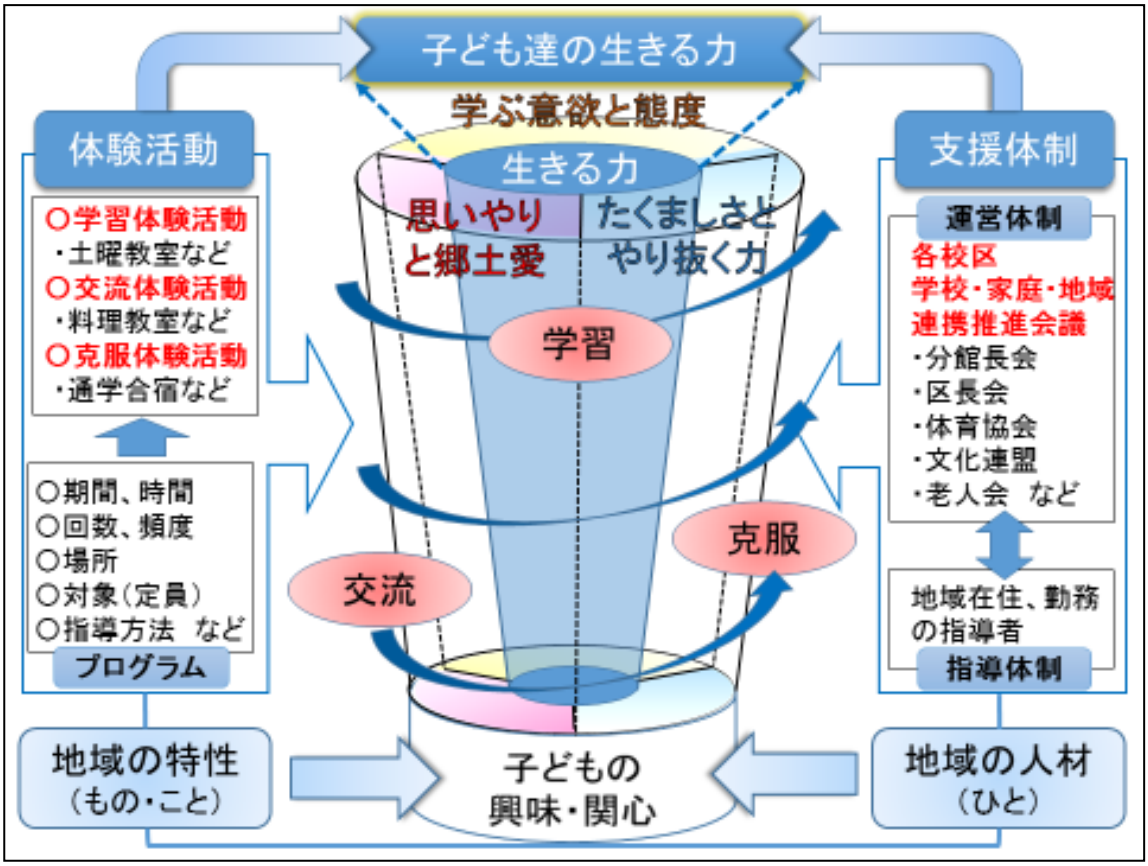
支援体制は、運営体制と指導体制から成り、運営体制は団体の連携を中心に、指導体制は団体の協力や個人への依頼、住民への公募などの方法で構成する。また、運営体制と指導体制が協同して進められるように、行政が連携を図りながら事業を展開する。以下は、支援体制の構成図である。

図２；支援体制の構成図

名　称	しらかねネット	中広ネット	せきじんネット
連携推進会議	上広川小 学校・家庭・地域連携推進会議	中広川小 学校・家庭・地域連携推進会議	下広川小 学校・家庭・地域連携推進会議
協力団体	小学校・分館長会・区長会・体育協会・文化連盟・老人会・ＰＴＡ・育成会		
対　象	上広川小学校区民	中広川小学校区民	下広川小学校区民



（３）全体構想図



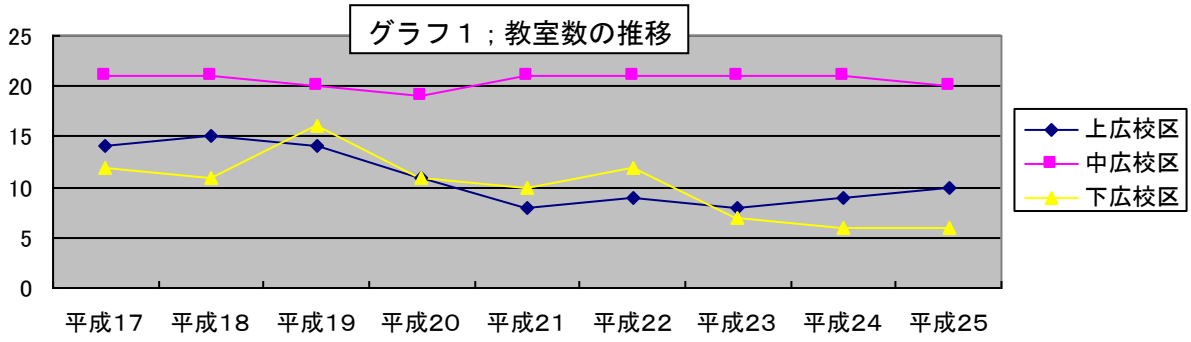
５　研究の実際

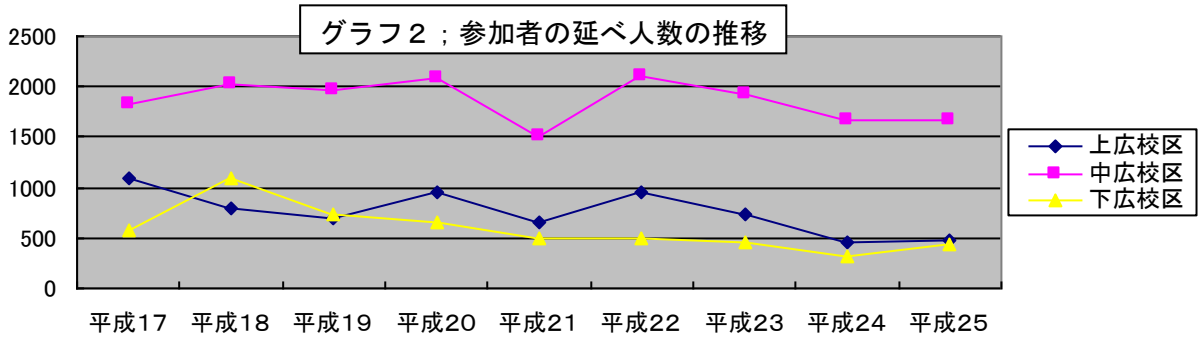
（１）事例Ⅰ　学習体験活動「土曜教室」

①　事業展開の経緯

広川町では、学校週５日制が完全移行された平成１４年度から、行政主導による土曜教室が開催されている。３年間は主に町全体による取り組みであったが、平成１７年度からは、体制も整い、各校区で開催している。以下は平成１７年度からの経緯である。

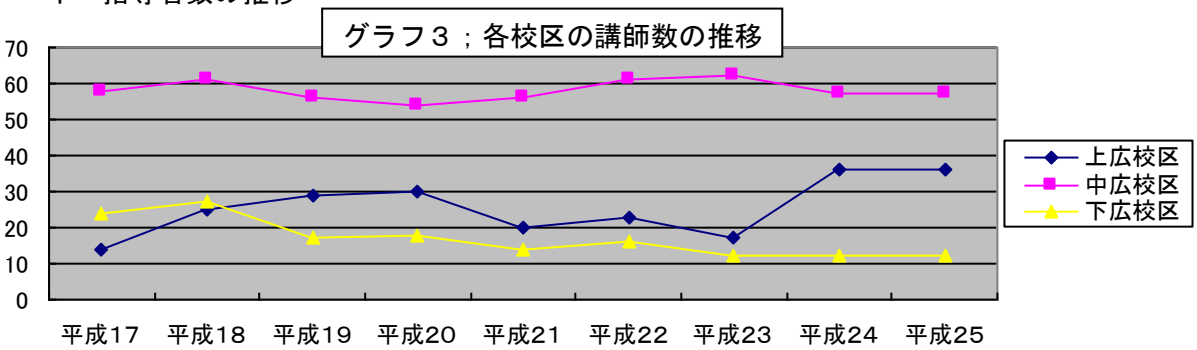
ア　教室数・参加者数の推移





グラフ１から、教室数が中広校区は２０前後で推移しており、他の校区は減少傾向にあることがわかる。これは、児童数の減少に伴うものであり、１教室の人数はあまり変化がない。グラフ２からも、参加者の延べ人数が若干減少しているものの、ここ数年は概ね横ばいとなっていることがわかる。これらのことから、１０年以上続くこの事業が、規模的にも維持されており、地域で定着しているといえる。

イ　指導者数の推移



また、土曜教室の定着は、グラフ３の講師数からもわかる。上広川校区は２倍以上に増えており、中広校区は概ね横ばい、下広校区は若干減少傾向にあるが、これは、児童数減少による参加者数や教室数の減少に伴うものである。これらのことから、地域が支える土曜教室が校区全体で定着しているといえる。

②　体験活動の具体例～中広ネットクラブ「土曜教室」（中広川小学校区）から～

中広川小学校区では、６月から２月の第２・第４土曜日（夏・冬休み期間中を除く）に中広ネットクラブ「土曜教室」を開催している。以下は概要（25 年度）と一部教室の様子である。

会　場	中広川小学校教室・パソコン室・図工室・家庭科室・音楽室・図書室・体育館など
教室数	２０；第２土曜教室１４、第４土曜教室１３（第２・４共通７）
対　象	小学生、成人（共通時間での開催、時間をずらしての開催）
開催時間	８：３０～１１：３０間の２時間程度（教室ごとに決定）
開催回数	第２・４土曜１３回（７教室）、第２土曜７回（７教室）、第４土曜６回（６教室）

ア　パソコン教室（４～６年生）；参加児童１４名、指導者３名

写真１；パソコン教室

キーボードレッスンでのローマ字打ちの練習やワード・エクセルの操作、インターネットの活用法などを学んでいる。写真１のように、子ども達は集中して取り組み、指導者の説明を真剣に聞きながら楽しんで活動していた。指導者は、子ども達が興味を持って取り組めるように、ゲーム形式での競争を取り入れたり、配布するワークシートを工夫したりしていた。

イ　子ども料理教室（１～４年生）；参加児童２３名、指導者４名

写真２；子ども料理教室

年齢に合った料理内容。説明と支援を受けながら材料を切ったり、炒めたりなどの活動をしていた。小さい子にも包丁を持たせ、炒める時も子ども一人ひとりに体験させた。指導者からは、「ハラハラする」という声も聞かれるが、写真２のように、手をとりながら一緒にしてみせることで、できることは任せながら指導した。また、「炒める時はどの材料から入れたらいい？」などと子ども達に考えさせたり、理由を説明したりなど、知恵を伝えながらの指導が見られた。片付けも自分達でできるように指導していた。

ウ　絵画教室（１～６年生）；参加児童１２名、指導者２名

写真３；絵画教室

学年に応じて、色鉛筆や鉛筆描画、水彩画など手法や対象は自由。屋外で描く子どもも見られた。描いたら先生に見せて助言を得たり、先生が周りながら指導したりなど、個別指導が行き届いていた。先生は優しく丁寧に関わり、随所で褒めながら指導してあり、子ども達も静かに集中して取り組んでいた。

写真４；かきかた教室

エ　かきかた教室；参加児童１８名、成人８名、指導者１名

写真４のように、各自の実態に応じた課題に取り組み、個別に添削を受けながら活動していた。子どもと大人が一緒に集中して取り組んでいるので、概

ね落ち着いた雰囲気であったが、中には、騒いで注意を受ける場面もあった。

オ　和紙ちぎり絵教室（１～６年生）；参加児童１５名、指導者２名

型紙を写し取り、その絵に沿って、和紙をちぎって自由に絵を描く活動。指導者が周りながら丁寧に指導してあるので、子ども達も集中して取り組み、きれいな作品が出来上がっていた。また、うまくできない子どもには、手厚く個別指導をして、支援や励ましの言葉をかけてあるので、写真５のように、どの子どもも意欲的に取り組んでいた。

写真５；和紙ちぎり絵教室

カ　フラダンス教室；参加児童２名、成人４名、指導者１名

専門的な指導者による本格的な指導の下、大人に混じって子ども達も意欲的に取り組んでいた。また、振り付けやその動きの意味などについて丁寧な指導が行われていたので、写真６のように、子ども達も伸び伸びと音楽に合わせて踊っていた。子どもと大人が一緒に活動する教室だが、子ども達の実態に合わせて、時間や内容などを大人たちが相談しながら進めていた。

写真６；フラダンス教室

キ　ファミリーバドミントン；参加児童２３名、成人５名、指導者６名

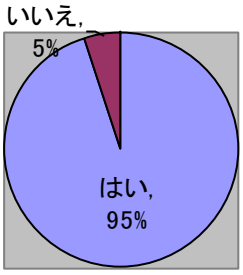
参加者が多く、体育館いっぱいで活動が展開されていた。写真７のように、２コートでゲーム形式、空いたスペースで２人組などの練習が行われており、親子で打ち合う姿も見られた。また、技能レベルに関係なく誰もが楽しめるように、簡易型のラケットやシャトルを活用するなど、用具の工夫もなされていた。

写真７；バドミントン教室

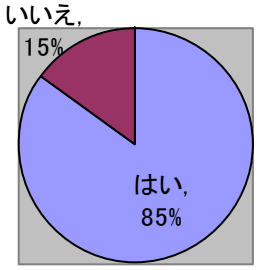
以上のように、子どもを中心とした対象者のニーズに応えるために多くの教室を設けており、地域ボランティアによる指導者も質・量ともに充実している。どの教室においても、子ども達の意欲的な態度が見られ、態度面等で注意や叱責がなされる場面はほとんどなく、子ども達は落ち着いた態度で取り組んでいた。

下のグラフは、参加児童への事後アンケートの結果である。グラフ４から、「教室に来るのが毎回楽しみであった」と答えた子どもが９５％もおり、教室の内容が概ね好評だったことがわ

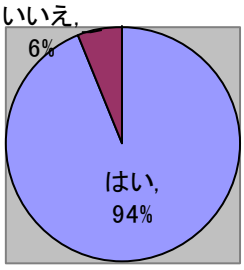
グラフ４；教室が楽しみ



グラフ５；進んで参加した



グラフ６；続けて参加したい



かる。また、グラフ５・グラフ６において、子ども達が主体的に参加し、今後への意欲を高めていることから、教室の学習内容に興味を深め関心を高めていることがわかる。

以下は、子ども達の感想である。

A児；休まず時間も守れました。いつも作り方を教えてもらったので、楽しく作ることができました。中広ネットに行くのを楽しみにしています。１年生から料理教室に入っていますが、４年生になっても入りたいです。とても楽しい１年でした。 B児；中広ネットに入って、いろいろな友達や違う学年の子とも仲良くなれました。パソコン教室では、ローマ字やいろいろな記号の打ち方を教わりました。ファミリーバドミントンでは、シャトルの打ち方などを練習したり、ネットの張り方を覚えたりしました。試合など楽しいことが多かったので、中学生になってもお手伝いとして入りたいです。

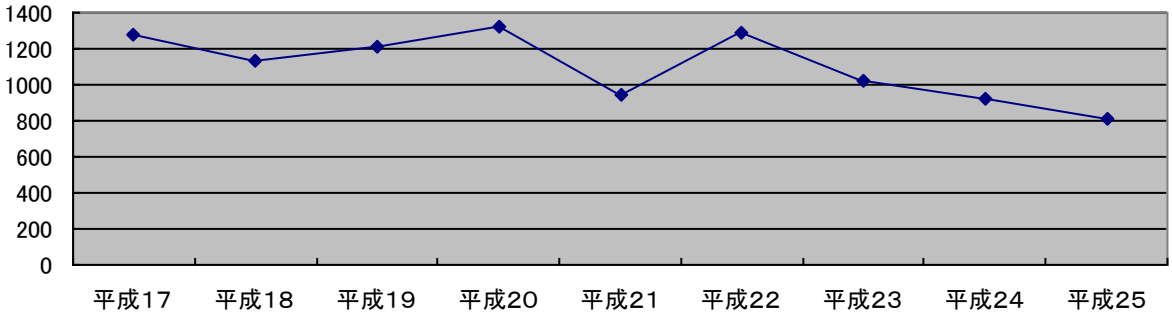
A児は、わかったことやできるようになったことに喜びを感じ、継続的な学習への意欲を高めている。B児は、複数のクラブでの楽しさや良さを挙げて、卒業後も運営スタッフとして関わりたいという意欲をもっている。このように、多くの子ども達が、土曜教室を通して学習内容への興味や関心を持ち、学ぶ意欲を高めていた。また、B児のように、多くの人とのかかわりに喜びを感じていることも教室参加への意欲を高めている要因である。

③　支援体制づくり

ア　運営体制

広川町の土曜教室では、行政が中心となってコーディネートしながら、各校区の学校・家庭・地域連携推進会議との協力体制を基盤にして、指導者の確保や運営スタッフの体制づくりを行っている。グラフ７は、指導者や運営スタッフの延べ人数であるが、平成２０年度の１３２０人を頂点に、最近では、若干減少傾向である。しかし、毎年延べ１０００人前後のスタッフがこの教室を１０年近くに渡って支えているということは、土曜教室を通して地域の教育力が維持できていることを示していると考える。

グラフ７；指導・運営スタッフの延べ人数推移



毎回の教室では、ＰＴＡから２名が運営スタッフとして参加し、受付を行う。その他、行政から、中央公民館館長と地域活動指導員の２名が参加し、運営に携わっている。この運営体制は連携推進会議によるものであり、学校も場所の提供を行い、毎回１名が職員室で待機している。この他、サポーターとして、教室の準備や運営に携わるものもおり、特に、スポーツ教室については、スポーツ推進委員が場所の準備や指導補助などを行っている。また、子ども達の安全を保障するために、安全スタッフも配備し、見廻りや監視業務、安全指導な

どを担っている。このように、多方面からの協力によって土曜教室は支えられている。

イ　指導体制

各教室の指導者は、連携推進会議に所属する団体の協力や住民への公募、個別依頼などで構成している。指導者はすべて地域のボランティアであり、各教室に概ね２名以上を配置している。また、プログラムは、指導者に任せており、毎年工夫が重ねられて充実したものに発展してきている。子ども（参加者）の興味関心を満たすことに重点が置かれており、指導者の姿勢も温かく、子ども達を育てるという立場で指導に当たってある。

以下は指導者の感想である。

Ａ；子ども達は熱心にがんばっています。もっと応えられるように、指導内容を工夫していきたいと思います。
Ｂ；いろんな学年の子ども達と出会えて楽しかったです。子ども達は、外で会った時もよく挨拶をしてくれます。
Ｃ；子どもや親、お年寄りなど、年齢を問わず参加してくださることに生きがいを感じています。未熟な私ですが、少しでも協力させてもらえたことを大変うれしく思います。
Ｄ；積極的な子とそうでない子に分かれる。準備や片付けも声掛けをしてようやく動く感じです。注意しても素直に聞いてくれない子もいます。

Ａは、子ども達の意欲的な態度に対して、さらに内容の充実で応えようとしている。また、ＢやＣのように、参加者との出会いや教室での指導を喜び、生きがいに感じている指導者もいる。中には、教室のために、家族と離れて町に残った指導者もいた。しかし、多くの子ども達を相手にする教室では、指導の難しさを感じることもある。Ｄは、なかなか言うことを聞かない子どもへの対応に悩んでいる。

指導者の悩みや課題に対しては、運営スタッフがアンケートや聞き取り調査で把握し、個別に対応して教室運営を支援した。また、年１回程度の土曜教室意見交換会により、指導者の情報交換を行った。この交換会は、運営スタッフと指導者が教室の成果や課題を交流し、課題への対応などについて協議するものである。

④　「学習体験活動」の考察

本研究において、②（Ｐ８・９）のように、子ども達のニーズに応えるための多様な教室を設け、専門的な内容や個に応じた丁寧な指導を提供したことで、子ども達は興味・関心を高めながら意欲的に取り組むことができた。このことは、事後アンケートにおける、グラフ４「活動の楽しさ」やグラフ５「主体的参加」、グラフ６「継続的参加意向」、意欲的な学習後の感想から伺うことができる。

支援体制においても、継続的な教室開催と協力体制の組織化、指導者同士の情報交換により、指導者の質や量を高めることができた。このことは、グラフ７での指導者数の維持や指導に喜びを感じる感想が示している。このような運営体制や指導体制の充実も、子ども達の意欲的な学びを支えることにつながっている。

これらのことから、土曜教室の学習プログラムの充実と支援体制の構築により、子ども達の学ぶ意欲と態度を育むことができたと考える。

（２） 事例Ⅱ　交流体験活動「地域に学ぶ料理教室」

① 事業展開の経緯

「地域に学ぶ料理教室」は、昔から伝わる郷土料理を中心に、調理を通して地域の人や歴史、産物などを再発見し、地域とのかかわりを深めようとするものである。この事業は、その目的の下、平成１５年度から継続して行っているものである。また、料理を教えてくれる指導者は、地域のお年寄りであり、料理教室での活動を通して、地域の大人とのかかわりも深めることができた。以下は、各校区での料理教室の内容である。

平成 15 年度～25 年度　地域に学ぶ料理教室

	上広校区	中広校区	下広校区
	内容	内容	内容
15年度	きなことおこのみごろし	お月見団子	かんたんおはぎ、しそごま・ちりめんむすび
	マリービスケットでつくるケーキ	いきなり饅頭、ポテキナ饅頭	アップルパンケーキ
		こんにゃく、長巻寿司	
16年度	こんにゃく、糸こんにゃくのキンピラ	きなことおこのみごろし	長まき寿司、かき玉汁
	高菜マン、かぼちゃマン、肉マン	そば	お月見団子（白玉団子）、　フルーツ白玉
17年度	長巻き寿司、すまし汁	長巻き寿司、すまし汁	きなことおこのみごろし
	豆腐だんご、苺大福、いちごあめ	おはぎ	そば
18年度	そば	ふなやき、クレープ	おからクッキー、　苺ジャム
	クレープ、梅が枝もち	いなり寿司、茶碗蒸し	クレープ、梅が枝もち
19年度	じゃがいも饅頭、じゃがいもだんご	じゃがいも饅頭	たけのこご飯、苺大福、おすまし
	ナン、パインのヨーグルトアイス	ナン、パインのヨーグルトアイス	ペペロンチーノ、カプチーノゼリー
20年度	コロッケ、苺ジャム	コロッケ、ポテトチップス、大学芋	ジャガイモのチキンハンバーグ
	わらつと納豆、大学芋、かりんとう		
	竹パン、あったかだご汁		
21年度	赤米のピザ、大根もち	赤米のピザ、大根もち	赤米のピザ、大根もち
	お茶のスパゲティ、茶飯、お茶のふりかけ		お茶のスパゲティ、茶飯、お茶のふりかけ
22年度	水ギョーザ作り	水ギョーザ作り	水ギョーザ作り
	肉まん作り	肉まん作り	肉まん作り
23年度	郷土料理　鬼の手こぼし	郷土料理　鬼の手こぼし	郷土料理　鬼の手こぼし
24年度	おからケーキつくり	おからケーキつくり	おからケーキつくり
25年度	だご汁作り	長巻寿司のチャレンジ	

以上のように、１０年以上も続く事業を通して、取り上げた料理は５８種類にも及び、多くの料理教室を開催することができた。

郷土料理は、以前は家庭の中で受け継がれてきたものであるが、最近では、核家族化などの影響により食べたことがない子どもも多く、子ども達は、初めて食べる味を楽しみながら、郷土料理への関心を高めていた。また、教えてくれるお年寄りとのかかわりも深まり、指導者にも大変好評であった。この事業が長く続いてきた要因は、参加者側の興味・関心の高まりと指導者側の意欲の向上にあると考えられる。

②　体験活動の具体例～「郷土料理　鬼の手こぼし」教室から～

・時間；９～１２時（３時間）
・場所；各小学校　家庭科室
・参加者；小学生３２名
・スタッフ；地域指導者３名、地域ボランティア１７名

地域指導者は、食進会などの協力により、事務局が依頼した方であり、地域ボランティアは、協力者の募集に応募した方々である。

この教室のテーマは、「八女地方に伝わる郷土料理を学ぼう！」であった。今ではほとんど作られなくなった料理なので、料理の歴史や調理の仕方などについての事前研修会を開催した。ボランティアにとっても地域に学ぶ料理教室となった。このように、各教室では、毎回テーマを決めて、食材の調達やメニューの決定、調理の仕方などを事前に打ち合わせて実施した。

ア　オリエンテーション

まず、写真８のように、本日の教室の流れについて説明し、指導者を紹介した。指導者は食進会に所属する地域のお年寄りである。子ども達にとっては、近所の顔見知りの方であったり、初めて会う方であったりする。いずれにしても、緊張と期待の時間である。

写真８；オリエンテーション

イ　班別ミーティング

次に、１０分程度の短時間で班別ミーティングを行った。班ごとに自己紹介をしたり、役割分担を行ったりすることで、緊張をほぐすとともに、全員が活動の見通しを持つことができた。

ウ　調理

料理の経験がない子どもには、指導者や地域ボランティアが個別に指導に当たった。丁寧な指導に、子ども達も安心して活動することができた。特に、包丁を使って材料を切る作業は、初めての子どもには緊張感があるものである。しかし、写真９のように、指導者が優しく手を取って指導することで緊張をほぐしながら楽しく活動することができた。

写真９；調理①

写真 10；調理②

作業に慣れてくると、写真 10 のように、低学年でも、楽しみながら自分で活動することができるようになった。年齢に応じた役割分担と丁寧な指導によって、子ども達は進んで活動することができた。以下は参加した子どもの感想である。

Ｃ児；いろんな人と作れて楽しかったし、おいしかったです。家で作れたら作ろうと思います。
Ｄ児；おちゃめなコック隊はとても楽しくて、大人から子どもまで楽しめるから何回でも参加したいです。今度は、おじいちゃんやおばあちゃんも楽しめるコック隊にしたいです。

Ｃ児は、友達や地域の大人との交流を楽しみながら、家庭でも作ってみようと意欲を高めている。また、Ｄ児は、お年寄りとのふれあいに喜びを感じ、思いやりの心を持つことができた。

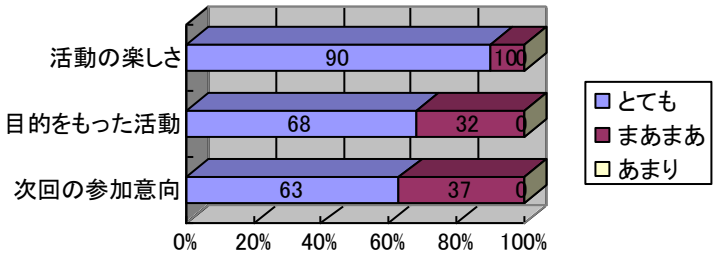
このように、子ども達は、地域の人とのふれあいを深めるとともに、料理を通して地域の食材や伝統的な料理を知り、地域とのかかわりも深めることができた。

エ　食事

調理後は、右の写真のように、全員で一緒に食事を楽しんだ。大勢で食べる楽しさとともに、この教室を通して、子どもと大人とのかかわりだけでなく、指導者や地域ボランティアといった地域の大人同士のかかわりも深めることができた。

特に、一緒に調理をした班ごとの食事では、料理のことを中心に会話が弾み、交流を深めることができた。

写真 11；食事①



グラフ８；料理教室後のアンケート結果

写真 12；食事②

料理教室後のアンケート（グラフ８）において、「とても楽しかった」が 90%いることから子ども達が活動を楽しんでいることがわかる。また、「目的を持った活動」や「次回への参加意欲」においても高い数値を示していることから、目的性や活動意欲が高いことがわかる。

③　支援体制づくり

ア　運営体制

事務局（行政）から、各校区の学校・家庭・地域連携推進会議に協力を依頼し、各学校に３名から５名の準備員を設置した。この準備員が企画・指導・運営を担うことで、各校区での教室の開催が可能になった。また、学校には、参加者の募集や会場の提供、分館長会と区長会には、地域ボランティアの募集において協力してもらった。

各校区の準備員は、地域の食進会の中から協力してもらえる方に依頼した。この準備員が、事前の打ち合わせを通して、前日の材料や用具の準備、当日の運営などを行う。その際、以下の３点を共通理解して進めることで、効果的・効率的に運営することができた。

① 食物の形や大きさにこだわらず、大切に扱う。
② 安心で安全な地産地消を考える。
③ ボランティアの打ち合わせ時間を設ける。

また、この共通理解により、スムーズな運営が可能になり、運営スタッフの自信にもつながっていった。

イ　指導体制

この「地域に学ぶ料理教室」では、準備員が指導者も兼ねる体制で行った。準備員が食振会での活動を通して普段から料理に携わってあることや、地域のことにも精通してあることがその理由である。このことで、運営と指導の連携を図ることができ、当日の準備から指導、運営がスムーズに行われるという利点もあった。

④　その他の「交流体験活動」

ア　親子パン教室・ハンバーグつくり教室（町内企業との連携）

右の写真は、広川町内の企業と連携して行った親子パン教室（写真 13）とハンバーグつくり教室（写真 14）である。

どちらも専門家の指導を受けて、参加者は意欲的に活動に取り組んだ。場所は、九州高速道路広川サービスエリア内の食堂やその厨房である。町内企業の協力により、充実した活動内容を提供することができた。

写真 13；パン教室

参加した子ども達や保護者にとっては、普段経験できない専門的な調理法を体験するとともに、地域の企業を身近に感じる機会となった。これらの体験活動により、地域の人の輪が広がるとともに、交通の要所としての広川町の特徴にも触れることができた。また、親子パン教室では、パンづくりを通して親子がふれあう時間も設けることができた。

写真 14；ハンバーグ

イ　はにわづくり教室・たけのこ掘り教室

写真 15；はにわづくり

写真 16；たけのこ掘り

写真 15 は、はにわづくり教室の様子である。広川町には古代の古墳があり、その歴史的な価値を知ってもらうために、銅鏡やはにわなどを作る歴史体験活動を行っている。子ども達は指導員の話を熱心に聞き、集中して制作に取り組んだ。この活動を通して、歴史を通じて広川町とのかかわりを深めることができた。

写真 16 は、たけのこ掘り教室の様子である。指導者の方の説明を聞きながら、子ども達や保護者も実際にたけのこを掘る活動に取り組んだ。活動後は、掘り立てのたけのこの試食会で地域の特産物を味わいながら、地域の自然のよさを感じることができた。

これらの体験を通して、広川町の歴史や自然にふれあうことができた。

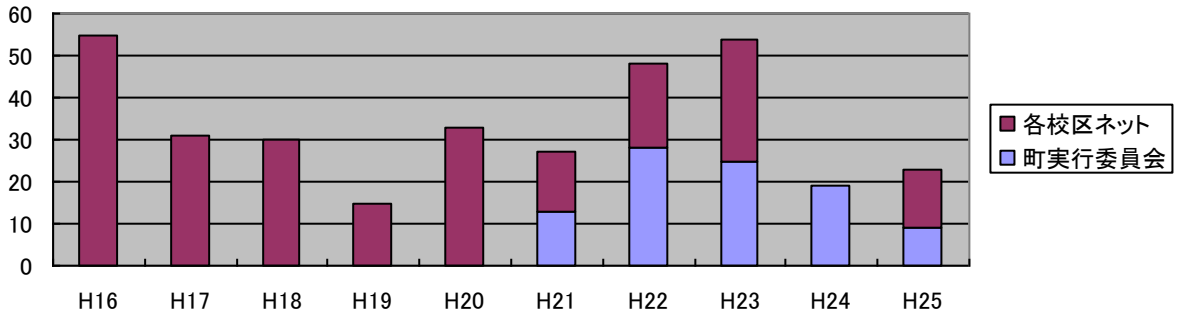
⑤　「交流体験活動」の考察

本研究において、②（P13・14）や④（P15）のように、多様な交流体験活動に取り組んだことで、子ども達は地域の人や自然、歴史などとふれあうことができた。また、この「地域のひと・もの・こと」とのふれあいを通して、B 児の感想（P13）のように、人に対する思いやりの心を持ったり、④イ（P15）の体験活動のように、地域に対する郷土愛を持ったりすることができた。このことは、各体験活動の中に、地域の人や自然、歴史などの地域の価値や特性が盛り込まれていることや、③（P14）の支援体制づくりにおいて、運営スタッフや指導者が共通理解を図りながら事業を進めていることによるものと考える。つまり、交流体験活動を位置づけた学習プログラムの工夫とそれを支える支援体制づくりの構築が有効であったといえる。

（３） 事例Ⅲ　克服体験活動「通学合宿」

① 事業展開の経緯

広川町では、各校区の学校・家庭・地域連絡推進会議を中心に、平成１０年度から上広川小学校区で、平成１６年度から中広川小学校区で通学合宿が始まった。その後、平成２１年度からは、教育力向上福岡県民運動と合わせて広川町通学合宿実行委員会を設置し、現在も各校区で実施している。下のグラフは、最近１０年間の参加児童数の推移である。



グラフ９；広川町通学合宿参加児童の推移　※H24 のネット主催は台風により中止

グラフ９から、町全体の参加者は、概ね３０名から６０名の間で推移しており、通学合宿が定着していることがわかる。

また、広川町では、従来、各校区のネットクラブが主催して、地域主導型の通学合宿が行われてきたが、町の実行委員会が設置された平成２１年度からは、町とネットクラブの両方で行っている。どちらの通学合宿もほぼ同数であり、実行委員会が設置された平成２１年度からは参加児童が増加していることから、２種類の通学合宿が存在することは、定着の上でも効果があるといえる。

各年度の活動場所は、以下のとおりである。

年度	校　区	活　動　場　所
１６	上広川小	鬼ノ渕・一応・馬場・梯公民館
１７	中広川小	久泉区公民館
１８	中広川小	川瀬区公民館
１９	中広川小	古賀・大原公民館
２０	中広川小	広川町保健・福祉センター
２１	上広川小・中広川小	長延・草場・大田区公民館
２２	上広川小・中広川小	逆瀬谷・鬼ノ渕・吉常・大田区・川瀬区公民館
２３	上広川小・中広川小・下広川小	小椎尾・六田・長延・大田区・藤田区公民館
２４	中広川小	増永区公民館
２５	上広川小・中広川小	増永区・一応・長延公民館

以上のように、ほとんどの通学合宿が各地区の公民館で行われており、運営も区長会や分館長会が中心になって進めている。

これらのことから、１０年以上にわたる継続した取り組みの結果、地域が主体的に子ども達の育成にかかわる事業の一つとして、通学合宿が定着してきているといえる。

②　体験活動の具体例

通学合宿では、仲間と共同宿泊生活をしながら学校に通い、炊事や洗濯、掃除、宿題などの基本的な生活を、地域の大人の支援を受けながら、できるだけ自分達で行うことを目標に実施した。期間は、実行委員会主催の６泊７日と、ネットクラブ主催の３泊４日の２種類がある。

実施に当たっては、以下のような約束事を子ども達と指導者等が共通理解して進めた。

【働くことを学ぶ】
・食事づくり、後片付け、洗濯、掃除、寝具の片付け及び身の回りの整理整頓
・次の見通しを立てて行動
【ものを大切にすることを学ぶ】
・食べ物の大切さや、施設を借用する「感謝の気持ち」と「ものを大切に使う心」
【友達と共に暮らす喜びとつらさを学ぶ】
・「してはいけないこと」「しなくてはいけないこと」をしっかりと学ぶ
・協力する大切さ、共に働くことを学ぶ

ア　買い物・炊事

写真 17 は、自分達で買い物をしている様子である。食事のメニューに沿って食材を選びながら近所の店で買い物をした。その食材を使って料理をしているのが、写真 18 である。このように、普段家族にしてもらっている家事を自分達で協力して行った。子ども達は、毎食作って食べる体験を通して、その大変さを感じながら、地域の大人の支援を受けて少しずつ自分達でできるようになった。

写真 17；買い物

写真 18；料理

その他にも、掃除や布団の上げ下ろしなども自分達で行ったことで、生活への意識が変わり、大変さを克服しながら自分達で活動することへの自信も持つことができた。

イ　食事・起床・就寝

普段家族と一緒にしている食事や起床、就寝なども自分達で行った。仲間と集団で生活する上では、基本的な生活習慣が大切である。子ども達は、その必要性を感じ、自分達で気を付けようという意識が芽生えた。また、仲間や支援してくれる地域の大人と一緒に生活することで、そのかかわりも深まった。（写真 19）

写真 19；食事

ウ　宿題・登校・下校

写真 20 は、下校後、自分で宿題をしている様子である。このように、家事全般を自分達で行う通学合宿の生活においても、学校に関することは自分で時間を見つけて行う必要がある。登校前の学校の準備や帰宅後の着替えなども同様であり、普段と同じ生活を誰にも言われなくてもできるようになった。

写真 20；宿題

以上のように、広川町の通学合宿では、特別なプログラムは組まず、普段どおりの生活を自分達で行うことを基本とした。基本的な日程は右の図３のとおりである。

この結果、子ども達は、自分で生活することや友達と一緒に暮らす大変さを感じながら、それを乗り越える達成感も味わうことができた。

下の感想からもその思いが感じられる。Ｅ児は、やるべきことが自分でできたことに喜びを感じており、Ｆ児やＧ児もできるようになったことに自信を持っている。つまり、慣れない生活という困難さを克服した喜びや自信などの体験である。家族への感謝もその困難や苦労がわかったからだと考える。

時　間	主な活動
6:00～6:20	起床・洗顔・布団整理
6:20～7:20	朝食準備・朝食・片付け
7:20～17:00	学校（帰宅後の宿題）
17:00～18:30	夕食の準備
18:30～19:00	夕食・片付け
19:00～20:00	入浴
21:30～	就寝

図３；通学合宿の日程

Ｅ児；自分のことは自分でできたからうれしかったです。きらいな食べ物があったけど、食べることができたのもよかったです。

Ｆ児；はじめはドキドキしたけど、２日くらいたったら楽しくなりました。友達もたくさんできました。料理も最初はできなかったけど、上手にできるようになりました。

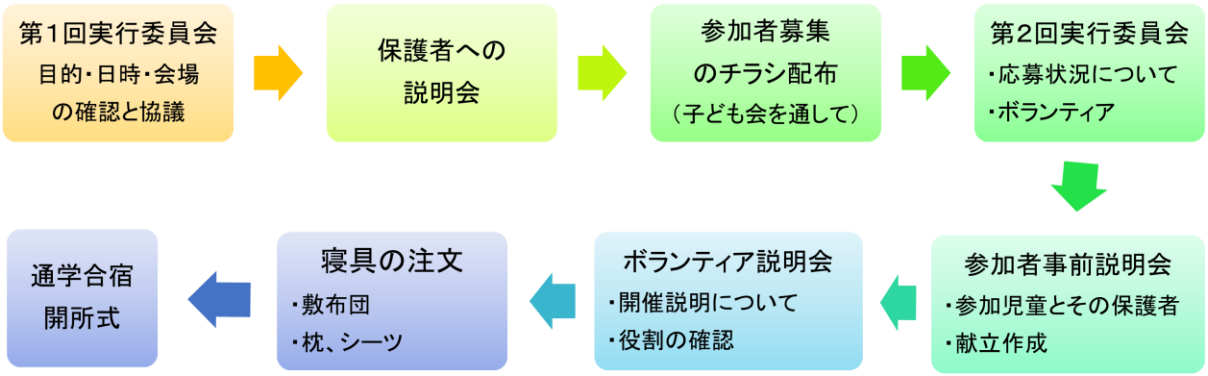
Ｇ児；班のみんなでがんばって、したこともなかった料理をたくさん作りました。とても自信がつきました。家に帰っても作ろうと思います。また来年もいろんなことに挑戦したいです。

③　支援体制づくり

ア　実行委員会の組織体制

各校区の学校・家庭・地域連絡推進会議が中心になって実行委員会を立ち上げ、行政がコーディネートしながら各団体との連携を図った。具体的には、分館長が実施期間を決定し、以下のようなスケジュール（図４）で通学合宿の準備を行った。

図４；通学合宿の準備



イ　指導・支援の立場（ボランティア等のかかわり方）

食事や調理の支援としては、子ども達が自分達で考えた献立に従って作るので、大人は安全面での見守りを基本として、子ども達が尋ねてきたら答えるという立場で指導した。下校後の生活の支援としては、道具の整理や洗濯、掃除、宿題などの確認をした。買い出しの支援とし

ては、安全面での付き添い。入浴については、子ども達は各家庭に分散して地域もらい湯を体験した。

このように、ボランティア等の指導者は、「子ども達ができるまで忍耐強く待ち、できたらしっかりと褒める。」「安全面などで危険な場合はしっかりと指導する。」という立場を全員がもてるように、ボランティア説明会で共通理解を図った。

④　その他の「克服体験活動」～リーダー研修「玄海自然の家」～

広川町では、小学校６年生を対象に玄海自然の家でのリーダー研修を行っている。この事業は、リーダーとして必要な、たくましさと忍耐力及び協力性などを養うために実施するものであり、子ども達の意識の向上を図る上では価値あるものである。

写真 21；結団式

写真 22；入所式

写真 23；シーカヤック体験

写真 24；キャンドルの集い

ア　結団式・入所式

まず、写真 21・22 のように、出発前の学校での結団式や玄海自然の家での入所式を通して、この研修の目的を意識させた。１泊２日の短い期間ではあるが、この研修を通して得た力を地域でのいろいろな活動に生かすことができるようにするためには、一人ひとりの意識の向上が必要であると考えた。

イ　自然の家での集団生活

自然の家では、決められたプログラムに従って行動する必要がある。そのためには、時間や規則を守り、進んで行動することが求められる。子ども達は、皆で協力してやり抜く大切さを学ぶことができた。

ウ　各種体験活動

写真 23 は、シーカヤックの体験活動である。その他、クラフトつくりなどの活動を通して、自然に親しみながら協力する楽しさを味わうことができた。

また、夜には、キャンドルの集いも行い、一体感を味わいながら、自分自身を見つめ直したり、今後への思いを膨らませたりした。(写真 24)

⑤　「克服体験活動」の考察

このように、②（P17・18）の通学合宿や④（P19）のリーダー研修を通して、子ども達は、課題を自分達で解決しながら、困難を克服することを体験した。また、そのためには、協力や人とのかかわり、あきらめずにやり抜くことが大切であるということも学んだ。このことにより、自分達で活動する内容を盛り込んだプログラムと支援体制における組織化・役割の明確化により、子ども達にたくましさややり抜く力を身につけることができたと考える。

６　成果と課題

（１）研究の成果

○　子ども達の生きる力を育むために、目的を明確にした学習・交流・克服の３つの体験活動を仕組んだことは、子ども達の学ぶ意欲と態度や思いやりと郷土愛、たくましさとやり抜く力を育てる上で効果があった。社会教育における各種体験活動を類型化することは、目的・内容・方法の明確化につながり、子ども達の生きる力を育む上で有効である。

○　体験活動を推進するための支援体制を構築したことは、地域主体による教育活動の活性化を図る上で効果があった。運営体制については、組織的な協力体制の確保と行政のコーディネートによる連携の強化が有効である。指導体制については、支援体制を活用した指導者の確保と指導者間の情報交換により、指導の充実につながった。

○　子ども対象の多様な体験活動事業を継続したことで、運営・指導スタッフの維持・拡大につながり、地域の教育力を向上させる核となった。土曜日の教育活動「土曜教室」における学習プログラムや支援体制は、他のイベント型の体験活動等の学習内容や方法、支援組織の基盤となるなど、各事業間の関連強化が事業の継続を支えることにもなっている。また、「地域で子どもを育てる」という機運の高まりにもつながった。

（２）今後の課題

○　児童数の減少が、土曜教室の教室数削減や各体験活動の参加者減少の要因となっている。子ども達の幅広いニーズに応えるためには、エリアの拡大や指導者の更なる充実など、運営面での工夫が必要である。

○　校区によって体験活動の数や質が異なり、校区間の格差が生まれている。これは、児童数や地域の実態によるものであり、この格差を解消するためには、参加に消極的な子どもや指導者への広報や参加奨励、指導者配置の調整などを行う。

＜参考文献＞

・社会教育推進全国協議会「社会教育・生涯学習ハンドブック第８版」、エイデル研究所、平成２３年。
・末本誠・松田武雄編著「生涯学習と地域社会教育」、春風社、平成２２年。
・髙階玲治編集「子どもの学力・社会力・体力をつくる　小・中学校の土曜スクールの展開」、教育開発研究所、平成１８年。
・月刊「社会教育～体験活動を仕掛ける～」、日本青年館、平成２５年度。
・文部科学省「第２期教育振興基本計画」、平成２５年。
・文部科学省中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」、平成１９年。
・文部科学省「新学習指導要領・生きる力　保護者用パンフレット（詳細版）」、平成２２年。

＜研究協力者＞

・広川町教育委員会生涯学習係　係長　井上周亮　　他係員
・福岡県教育庁南筑後教育事務所　主任社会教育主事　松延　聡